カレン生と死

B・D・コーレン　著　吉野博高――訳

昭和51年11月10日　初版発行

© Printed in Japan

カレン　生と死

《検印廃止》

著者　B・D・コーレン

訳者　吉野博高

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　株式会社徳住製本

振替口座東京2639番
電話東京263局0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2

発行　株式会社　二見書房

0098-760484-7339

KAREN ANN QUINLAN

カレン　生と死

B・D・コーレン

吉野博高訳

二見書房

Title: KAREN ANN QUINLAN
Author: B. D. Colen
Copyright © 1976 by B. D. Colen
Japanese translation rights arranged with
Sanford J. Greenburger Associates Inc., New York
through Charles E. Tuttle Company Inc., Tokyo

眠たげな人を眠らせるように、死にゆく人は死なせてやるがいい。自然にさからうことは間違いだし、無易な時はあるものだ。

スチュアート・オルソップ『執行猶予』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

第一章　審判の日　8
第二章　両親の決断　14
第三章　尊厳死　37
第四章　神に背いて　55
第五章　象牙色の倫理　73
第六章　頭上の刃（やいば）　93
第七章　神の十字架　112

第八章　迫られた選択　133
第九章　生者の遺言書　156
第十章　夜に涙はつるとも　174
第十一章　黄昏（たそがれ）　189
エピローグ　212
訳者あとがき　218

カレン　生と死

第一章　審判の日

裁判の終った日も、始まった日のように雨が降っていた。モリス郡地方裁判所の正面に植えられたカエデの老木には、まだ葉が残っていた。灰色の霧が、この十九世紀風の建物をほのかに包み、残り葉の彩りを鈍くさせていた。百五十人を越える新聞記者やテレビカメラマンの群れが、クインラン夫妻の退廷を待ちながら、寄せては返す波のように芝生の上を往き来していた。雨にぬれた緑の芝生は、すでに泥だらけの灰色に変っていた。

入口のドアが開くたびに、報道陣が前方の階段に向かって押し寄せ、マイクを持つ手が伸び、ライトが浴びせられた。だが、出てきたのが裁判所の職員や弁護士、あるいはたまたまこの日に駐車違反の罰金を払いにきた不運な市民であることがわかると、ふたたびライトが消え、メモ用紙がポケットにしまいこまれた。そして、その都度、報道陣は、入口に人垣ができるとクインラン夫妻は外に出られませんという保安官代理の注意に従って、わずかながら後ずさりするのであった。

やがて、故ケネディ大統領に似た風貌のドナルド・コレスター検事が裁判所の外に姿を見せた。彼は、ジョセフ・クインランの歴史的ともいえる嘆願に対して、はじめて公式の反論を提起した人物で

ある。コレスター検事が入口の階段を降りると、待ちかまえていた報道陣の波が彼を取り囲んだ。質問の矢が、いっせいに放たれようとしていた。コレスター検事は、ロバート・ミューア・ジュニア判事の裁決をどう考えているだろうか？　ロバート判事の裁決は、カレンに対する『殺人的行為』をあくまで避けようとするものであり、検事はそのために戦ってきて勝利を得たのである。

「このような裁判では、本当は勝者も敗者もないものです」

コレスターはそう語った。

「もっとも、カレンとご両親、あるいはそのほかに、このアメリカで生きながらの死を経験している大勢の人たちとその家族や友人たちには、今回の裁判の結果は、より深刻な影響を与えるでしょう」

ミューア判事の判決が下される一九七五年十一月十日まで、カレンは二百四十一日間にわたって昏睡状態にあった。彼女が意識を失ったあの四月の夕方以前の時間は、もはや過去の生に属するかのようだった。それまでは五十三キロあった体重も、今は三十四キロに減っていた。カレンの若さあふれる健康的な四肢は、木片に人間の皮膚をかぶせたと思われるほどすっかり萎びてしまい、骨は、たんなるカルシウムのかたまりとして体の外に突き出しているだけで、ふたたび動こうとはしなかった。カレンは、判決の日までに、まるでカマキリが祈りを捧げるような奇怪な姿になっていた。収集箱のなかの昆虫標本を固定するピンのように、カレンの喉から人工呼吸器が突き出ていた。もちろん、彼女は、その間、誰とも口をきかなかった。

いやそれどころか、セント・クレア病院の医師や看護婦の観察によれば、どう考えても意識を持っているとはいえないふうだった。カレンは、たしかによくからだを動かした。だが、それは僧衣の飾りボタンと同じように意味のないことだった。ときどき、呻き声を発したが、それもたんに、肺と人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

工呼吸器の力によって空気が喉を通過する際に生じる、声帯の自動的な働きによるものだった。
また、カレンはしばしば、目を開けてまばたきをしたり瞳を動かしたりした。だが、一方の瞳が右を向いているのに、もう片方が左を向いているという具合で、結局は何も見てはいなかった。もちろん、一日に二度様子を見にくる両親の顔を見分けることなどできるはずがなかった。母親が話しかけ、娘を死なせてくれるようにと神に祈る言葉や、毎晩おやすみの挨拶をいう声もカレンには聞こえなかった。

「昨夜は、いつもより辛い気持になりました」
カレンから人工呼吸装置を取りはずすのは殺人行為であるというミューア判事の判決が下された翌日、母親のジュリーは私にこう話してくれた。
「あなた方ご両親は、これからも今までみたいに病室へ足を運ばなければならないし、苦しみは増す一方だし……。辛い気持というのは、そうしたことを考えたからですか？」
私は尋ねた。
「いいえ。それは大して辛いことではありませんが、たぶん、娘の希望をかなえてやれなかったからそういう気持になったんだと思います。カレンは、万が一、自分がこうした状態に陥ったなら、人工的な手段によって生かされるのはいやだと、何かの折りにそうはっきり申しておりました。この点は、公判でも証言したとおりです。でも、これでもうカレンの望みどおりにはしてやれなくなった、そう思うといっそう辛い気持に襲われて……。でも、私たちはできるだけの手は尽くしましたし、力の及ぶかぎり努力はしたつもりです」

新聞の見出しに『眠りつづける女性』と書かれた娘の母は、赤く充血した目を私に向けてそう答えた。目の奥にキラリと光るものがあった。

「法廷の結論は、もし今、カレンが自分の気持を口にすることができたなら、以前とは違って、あくまでも生きつづけたいというはずである、というものだった」

父親のジョーがかわりにつづけた。

「でも、そんなのは夢みたいな話です。こんな状態が七ヵ月もつづけば、なおさら娘の気持が変るはずがありません。自分のからだを自由にしてやりたいと思うのは、誰よりも娘自身のはずです」

こうした会話のあいだにも、クインラン家の内外では、放送の準備をするテレビマンやら、すでに録画撮りを終えて帰ろうとするカメラマンでごったがえして、人の出入りがあとを絶たなかった。クインラン一家は、ニュージャージー州の郊外の、灰色のこれといって特徴のない二階建ての家に住んでいた。この日は、芝生の上にまでテレビカメラが据えられて、CBS放送の職員がちょうど録画撮りの最後の場面を撮っていた。

アナウンサーのアーノルド・ディアズが、一家の住んでいる建物と聖母マリアの像を背にして、カメラに向かって話していた。

「一家の苦しみは、これからもつづくでしょう。しかし、善良で物静かなクインラン夫妻は、以前と同じような落ち着いた生活を取り戻すよう努力すると語っております。こちらは、CBSのアーノルド・ディアズです。本日は、ニュージャージー州のクインラン一家を訪問いたしました」

明るい午後の日射しがまぶしかったのか、アーノルドは恨めしげな様子でちらりと太陽に目をやった。そのうえで、彼はカメラマンに向かってしきりに弁解していた。

「どうも、申しわけないが、こうまともに日射しをくらったんじゃ。とにかくもう一度やろう」
少しの間をおくと、彼はふたたび話しはじめた。
「一家の苦しみが癒されるのはいつの日のことでしょう……」
家のなかでは、疲れきった様子のジョーとジュリーの夫妻が、ABCニュースのロイ・ニール記者からインタビューを受けていた。インタビューが終わり、ジュリーが椅子を立とうとすると、ニール記者が注文をつけた。
「そのままちょっと坐っていていただけませんか？　お互いに顔を見合わせていてください」
世間が、ジョーとジュリーの苦しい心境を知った九月以来、夫妻は何度この種の注文に応じてきたことだろう。二人は、カメラの前で放心したようにお互いの顔をのぞきこんだ。
「またこのポーズね、あなた。一日じゅうこうやっていたみたいな気がするわ」
ジュリーは、けだるそうな笑みを浮かべて、夫にそうつぶやいた。
その夜は、七時ごろになると、イタリアからきた一行を含めて取材陣は全部姿を消していた。ジュリーは、居間や玄関の灯りをすべて消してしまった。不在を装ってこれ以上お客が来ないようにするためだった。こうして自宅に身をひそめたカレンの両親は、台所のテーブルのそばに腰をおろすと、私とふたたび静かに話しはじめた。
「娘さんを訪ねるときはいつも、なんといってあげるんですか？」
私は尋ねた。
「いつも、愛しているといってやるんです。それに……」
テーブルの上に視線を落としながらそう答える父親の声が、しだいに消え入るように小さくなって

いった。
「この事件の進み具合なども話して聞かせるのですか？」
「いいえ、ただ、愛しているというだけです。私たちは、おまえのことをとても愛している。でも、神さまはもっとおまえのことを愛していてくださる。だから私たちは、神さまがいつもそばにいてくれるように祈っている、といってやるのです」
そういってからジョセフは、弁解するようにつけ加えた。
「もちろん、カレンには何もわかりません。でも、看護婦さんがしているように、とにかく何か話してやるんです。娘がその言葉を聞いているのだと思いながら。ふつうの昏睡状態でないことはわかっています。脳がやられているのですから。でも、それが今では習慣なんです」
「これからも、今までと同じような生活がつづくと思いますか？」
「いや、たぶん変るでしょう。精神的な意味で……」
「裁判とか法律制度に失望したという気持は？」
「それはあります。私たちの無力さを思い知らされたのですから。ふつうの場合とちがって、これは患者と医者と病院の三者間で解決のつくような問題ではありません。とほうにくれた私たちは、この問題を裁判沙汰にすることによって、法廷の慈悲にすがろうとしたのですが」
ジョセフ・クインランは、ひと息おいてつづけた。
「法廷は、困っている人びとを助けてくれる場所だと思われています。でも、法廷は私たちを助けてくれなかった。法は人びとのために……、人びとを救うためにあると、私たちはいつもそう信じてきたのに」

第二章　両親の決断

一九七五年四月十五日午前二時、クインラン家の電話がけたたましく鳴って、このときから一家の悲劇がはじまった。

「ニュートン記念病院の集中強化（I・C・U）治療室の看護婦さんが、私たちに知らせてくれたのです」

ジュリア・クインランがいった。

「娘のカレンは、バイラムという小さな町で友だちと一緒に暮らしていました。彼らは最初、娘が意識を失っているのに気づきませんでした。そのうち娘の呼吸が止まっているのを知ると、警察に電話して救急車を呼んだのです。娘はすぐに病院へ運ばれました」

カレンの人柄や行動についてまったく相反する二つの見方があるように、その夜の出来事についても二つの説がある。一説によればこうである。近くのバーで開かれた友人の誕生パーティーに出席したカレンは、したたかに酒を飲んだあげく、眠りこんでしまった。そこで、友人の一人がカレンを家に連れて帰り、ベッドに寝かせたが、数分後に彼女の呼吸が止まっているのに気づいて警察に電話したという。だが、別の説によれば、カレンはパーティーを辞して家に帰ってから気分が悪いといいだ

し、二階の寝室へ上がっていった。そして、少したってから様子を見にいった友人たちが、カレンの呼吸が止まっているのに気づいて警察に電話したという。母親のジュリア・クインランは後のほうの説、カレンの『眠り姫』物語を信じているようだった。だが、この後のほうの説が事実なら、カレンが昏睡状態に陥った原因をつきとめる手がかりがまったくなくなり、謎はいっそう深まるばかりである。

「娘さんが病院に運ばれた最初の夜、医師はなんといいましたか?」

クインラン夫妻に私は尋ねた。

「医師には何もわかりませんでした。そのときは、ただ娘が昏睡状態にあるということ以外には……。私たちが最初に娘を見舞ったときもそれ以後も、娘と私たちのあいだには会話一つすら交されていないのです」

ジュリーが答えた。

「医師はどんな検査をしたのですか?」

「何もかも調べました。血液や尿の検査から脳の検査、それに脳血管造影検査(これは、血液中に着色液を注入し、ある特定の器官、この場合は脳に低位のX線を透過することによって着色液の循環を観察するものである)にいたるまで、ありとあらゆる検査をいたしました。でも、結果はいずれも否定的なものばかりでした」

公判で証言した医学の専門家たちは、酸素の欠乏によってカレンは脳の機能障害をおこしており、回復の見込みはまったくないと思う、と語った。だが、彼らにも、何が原因で彼女の呼吸が止まったのかはわからなかった。カレンの治療にあたった医師たちは、どのような努力も無駄であることを知

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo